

●論壇

都市国家に学べ

川喜田二郎*

Learn from "Polis"

Jiro KAWAKITA*

1953年3月に初めてネパールを訪れ、大変驚いたことがある。この国の首府 Kathmandu を含む小盆地を Nepal 盆地 (Valley) という。小さくとも岷々たるヒマラヤ山中では稀な平坦地だ。その孤立的天地に、大小幾つもの都市を見いだした。Patan は最古の都市らしく、他に Kathmandu, Bhadgaon など、幾つもある。この盆地には西暦4世紀に既に都市があった。

しかも、ネパールが領土国家の段階に突入し始めたのは実に新しい。今のグルカ (Gorkha) 王朝がネパール盆地を征服した1769年以後のことである。それまで14世紀以上の間ネパール山中にあった都市は、事実上都市国家 (City State) であった。幾つかの都市国家の連合の上に共通の王が戴かれた期間もあったので、実態が都市国家段階だったことを多くの人が誤認したのだろう。

各都市には、中心に王宮や都市の守護神祠が今なお残り、3階建て前後の住居や店が、びっしり市街地を埋めている。町中には小さな広場が幾つかある。祭は頻々と行われ、そこでは宗教、政治、経済、娯楽などが、渾然と一体になっている。なお、上水道、下水道まで整っていた。今日なお、それらの町々は都市国家段階の構造物パターンを残し、風習にもその残影がある。

多くの人が文明の歴史を約5000年という。しかし、もし帝国という領土国家段階を真正の文明と見るなら、その最初はアカイメネス朝ペルシア、すなわち西紀前数世紀と見るべきだろう。いわゆる文明5000年の前半約2500年は、実に都市国家を典型的指標とする「亜文明」段階だったのである。この重要な事実を現代人は忘れている。その1因は、今日生きた都市国家が地上にひとつもなく、ネパール盆地のような生きた残影すら極めて稀だからだろう。だが今や、「もう1度都市国家に学べ」と訴えるべき時代が到来した。それはひとつには自動車の氾濫のためである。

都市国家とは、人間の足と肩だけで築きあげた「暮らし方」のひとつのクライマックスである。ネパール盆地の町の道路ひとつ見ても、その幅は駄載や馬車の交通のためにすら狭すぎる。だからこそそこには、人と人が個性ある生身の人格としてやりとりする場が保証されたのだろう。このような「広場」こそ、人間社会とその文化に、創造のいのちをもやす土壌を保証したのだ。システム化のみ狙いがちの古来の文明は、この大切な土壌を損ねてしまった。近代文明はなおこの宝を無視し、車の氾濫は更にその傾向を助長した。

都市国家が内部から解体する前夜に、洋の東西を問わず世界の思想家たちが集中的に輩出している。諸子百家、釈迦、マハーヴィーラ、ツァラトゥストラ、キリスト教初期予言者、ギリシアの哲人たちなど。哲学者ヤスパースのいう「枢軸時代」だ。ローマは、周辺の都市国家を片端からローラーにかけて潰して回った。しかし、みずからは都市国家として出発したため、その残影を永く引きずった。最後に発展的解消を遂げる前夜祭となったのがイタリアのルネッサンスではないか。ブルクハルトの本を読むと、そこでは輝けるフィレンツェと悪徳残虐の見本とが共存している。このように、都市国家解体前夜とは、人と人の触れあいという大切なコミュニティの宝を失うまいと苦悶した時代に思われる。しかし、現代人としてホットに都市国家から学ぶべき点も多い。世界中のヒッピーが、なぜ最後にネパール盆地に流れこむのか。人間社会から安らぎと交わりを奪い、いのちの広場を奪いつつあるのは、人と車との誤った混在ではあるまいか。

* 筑波大学教授

Professor, University of Tsukuba

原稿受理 昭和55年7月21日